

## 資源循環型農業づくり戦略

JA秋田しんせい 常務理事 岡部五一郎

秋田県の南西部にある由利本荘市・にかほ市をエリアとするJA秋田しんせいは、東に出羽丘陵、西に日本海、南に鳥海山を擁し、管内に異なる気候条件をもっています。平成9年に旧1市10町の11JAが合併して誕生。農業の中心は稲作で、土づくりにこだわった米の生産に力をいれており、青果物ではミニトマト、アスパラガスなどの栽培が盛んです。また、黒毛和牛子牛の生産も盛んなほか、「秋田由利牛」「秋田鳥海りんどう」「比内地鶏」など注目の農産物を生産する地域です。

合併当初、土づくりへの取組みが、県内でも下位であったことから、平成10年度より土づくりの取組みを強化しました。平成22年まで、堆肥の代替品として、「アヅミン」を施用し「土づくり実証米」や野菜等を生産してきました。しかし、世界的な需要増に伴う肥料の高騰や物流時に発生する二酸化炭素の排出抑制等を考慮し、本来土づくりの基本である堆肥に着目し活用することを考えました。持続的に発展できる地域農業の確立を目指して、地域資源の有効活用と循環型農業、環境に配慮した安全・安心な農畜産物生産の3つが柱となっています。

地域内の有効資源である堆肥をペレット化して圃場に散布することで、土壌改良、基肥の補完の効果を得て、肥料コスト削減、環境負荷の軽減を図ります(ペレット堆肥施設)。堆肥の原料は、管内農家からの牛ふん、肥育豚舎の豚ふんにより安定的に確保し(肥育豚舎)、豚には管内で生産された飼料用米を混合して

給餌することで「農家(水田)→豚舎→ペレット施設→農家(水田)」の循環が生まれます。この循環に加えて、温湯消毒種子を農家に供給することで農薬使用成分数を削減し、更なる環境負荷の軽減を図ります(水稻種子温湯消毒施設)。

循環資源による土づくり、温湯消毒種子により環境負荷軽減を実現して生産されたJA独自ブランドである「土づくり実証米」は“環境保全米”として更に発展させ付加価値を高めることを期待しています。

肥育豚舎にはSPF豚(=特定病原菌不在)を導入し、管内飼料用米の給餌により安全・安心なこだわり豚肉(秋田鳥海ポーク)としてブランド化を目指しています。豚の飼育方法は、オールインオールアウト方式を取り入れ、子豚は由利本荘SPFセンターより75日齢の子豚を導入し肥育日数100日(出荷日齢は175日)、常時1,000頭飼育(年間出荷頭数3,000頭)しております。JAの肉豚肥育の農業経営は、資源循環型農業づくり戦略の一つとして始めたもので、産地全体の農畜産物のブランド力を高め、農家所得の向上を図ることも目的としています。

現状として飼料の高騰、輸入豚肉の増加により豚価の低迷が続き、当初計画より一割ほど販売価格が未達ではあり、上物率についても課題を残しています。まずは経営を安定させるため、肥育技術向上を図り出荷までの日数を90日まで短縮することをあらたな目標としています。

(おかべ ごいちろう)